

MIF 研修旅行紀

-Yoshitake Nishi, Director of MIF (Matsumae International Foundation) 12th July, 2019

ドイツ連邦共和国（当時）のフンボルト財団の崇高な理念と実践に深く感銘し、世界の国々の永遠の平和と友好、親善の道を求め、平和国家としての歩む縁となることを願って、MIF（松前国際友好財団）は、故松前重義博士を中心に 1979 年創立した。この主旨を反映させるため、この研修旅行を独自 program として設定された。

6月30日朝 10 時 7 分品川発新幹線のぞみで京都へ、駅併設ホテル 2 階フロント集合。日本の 13 大学(九大(2 名)、岡山大、鳥取大、立命館大、京大、岐阜大、北陸先端大、横浜国大、東海大、東京農業大、千葉大、東北大、北大)で国際共同研究を実施しているインドネシア、インド、パキスタン(2 名)、バングラデシュ、アフガニスタン、カメルーン、エジプト(2 名)、スーダン、ケニア、ポーランド(2 名)、ギリシャの 11 カ国 14 名の博士研究者群と、ご両親の仕事の都合で高校までグアテマラに滞在し、犯罪や貧困などの社会問題の根源である格差拡大を防ぐため開発経済学で著名な Boston 大に入学し、三菱銀行（当時）で活躍した MIF 事務局長、東海大学文学部北欧文学科卒業し、冷戦の壁崩壊時にフィンランド・エストニア・ポーランド・ハンガリーに滞在し、東海大学附属医学部附属病院・初等中等教育課・国際課を歴任した MIF 記録担当と、流暢な英会話で豊富な話題の添乗員(東海大 OB)、さらに、英語観光ガイド(国家資格保持)で見学をした。

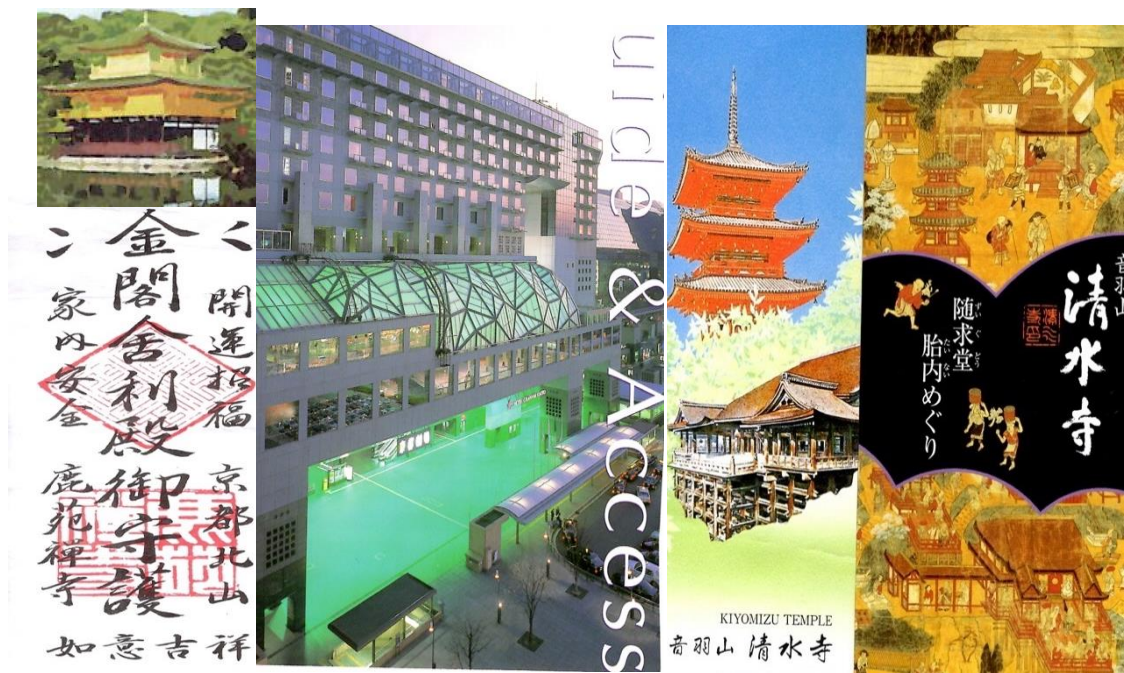


図1：金閣寺、ホテル、清水寺

MKバスで金閣寺観光と嵐山で竹林の散策をした。知的会話が多く、‘京都の竹とエジソンの電球’や‘徐かなること林の如く’は雑木林ではなく竹林ではないかとの仮説など

話し、ブレインストーミングが出来て面白かった。駅のホテルレストランで Opening Reception を行った。開会挨拶は以下の様な Speech にした。

<2019 年度第 1 回研修旅行 初日夕食会挨拶>

<2019 年 6 月 30 日（日）於 ホテル・グランヴィア京都・京林泉>

事務局長： Good evening! MIF Fellows and distinguished guest! I'm pleasure to introduce Dr. Nishi, Prof. Emeritus of Tokai University as well as a board member of Directors of Matsumae International Foundation (MIF).

西挨拶： Thank you! Chairman Mr. Watanabe, Secretary (Director) General of MIF founded by Dr. Shigeyoshi Matsumae, great innovator of telecommunication system with long distance, high quality sound and multi-channel by using unloading cable of the first Japan original national project, prior to Shinkansen.

Ladies & Gentlemen, MIF Fellows and distinguished guests. Good evening.

My name is Yoshitake Nishi, Materials Scientist, that is a Current Alchemist

On behalf of the MIF, I would like to welcome you all to this brief Study Tour to feel the typical history, culture and tradition of Japan. You have already enjoyed the first day of the tour today in Kyoto, former millennium capital for ancestors to cultivate & establish the original cultures in Japan dynasty Civilization. Tomorrow afternoon, we will visit the

Nara city, the first capital with international metropolitan function including Houryuu-ji temple with 5-storied wooden pagoda, that is, the oldest wooden building in the world.

On the 3rd & 4th days, we will visit Hiroshima for the purpose of considering the meaning of “World peace”. When the MIF-founder officially investigated the Hiroshima nuclear explosion as a cabinet councilor of Technology at just the end of WW-II, he directly viewed the horrible sight. Therefore, “World peace” is the main theme for the MIF Fellowship program directly designed by the MIF-founder himself. By the way, I am sure you will enjoy this tour and will get lots of interesting stories to tell with your friends, colleagues, students and family members after going back to your own countries. Now, I would like to propose a toast for our friendship, health, successful achievements and future prosperity.

Kanpai !

合席は京都大学医学部で研究しているアテネ国立大学の Ioannis MICHOPoulos 精神科医、バーミアンから甘いプチトマトの栽培の研究を東京農業大学でやっている農学者ハジム氏、さらに、とにかく可哀想なくらい忙しい添乗員であった。天ぷら中心の和食に、会話も弾んだ。京都大学医学部名誉教授の MIF 理事の和食と日本人の長寿の関係についての含蓄ある講演を拝聴した。研修生も和食により強い関心を示していることを感じた。閉会后、洗濯して、11 時に就寝した。

7月1日：6時起床、6時30分和朝食。8時フロント集合し、バス乗車、清水寺見学。
奈良にバスで移動し、美味しい天井で昼食をとり、大仏の東大寺と、最古の木造建築の
法隆寺を鹿の糞を避けながら訪問した。法隆寺の宗派は法隆寺派で、檀家を持たず、聖
職者の修行の場である事を初めて知った。インド、パキスタン(2名)、バングラデシュ、
アフガニスタンの研究者群は宗派にかかわらず、驚くほど仏教に詳しかった。京都駅に
戻り、夕食は美味しいバイキング料理を食べ、ポーランドの地球科学者や医師、さらに
事務局と交流し、楽しい時を過ごした。洗濯して、11時に就寝した。



⑫ Kudara Kannon dô (The Kudara Kannon Hall)
Heisei Period: 1998
The Kudara Kannon statue (Asuka Period) bequeathed to Hôryûji is world famous as a Buddhist statue representing Japan's Buddhist art. Further, the tall and slender well-proportioned figure, rare for a Japanese Buddhist statue, and its graceful and merciful expression have captivated many people. It has been Hôryûji's long and fervent desire to construct a Hall to enshrine the Kudara Kannon in peace. This dream was finally realized in autumn 1998, which is this Kudara Kannon Hall.



Kudara Kannon

東大寺



TÔDAI-JI Temple www.todaiji.or.jp



図2：東大寺と法隆寺

特筆すべきは、研修生との交流を通じて、世話している事務局から、研修生と高校生との交流の場についての idea を出された。非常に良い事であると賛意を表し、スーパーサイエンスハイスクール（略称 SSH、高等学校において、先進的な理数教育を実施するとともに、高大接続の在り方について大学との共同研究や、国際性を育むための取組を推進する。また創造性、独創性を高める指導方法、教材の開発等の取組を実施する）

を行っている東海大学附属高輪台高等学校の校長に相談すると、現実化する可能性が高い事を言い添えた。

さらに東海大学も MIF を活用する事を考え、教育支援センター長に相談したところ、研究担当副学長から「東海大学で公開講座を行い、博士課程大学院生は受講が、単位取得につながる制度を活用すれば面白い」との Idea が出てきた。具体的な可能性が出てきたら、MIF 理事長から学長に正式に相談・要請されたらどうかと、7月10日に MIF 事務局長には電話しておいた。

7月2日：6時起床、6時30分和朝食。8時15分フロント集合し、新幹線で広島に向かった。さらに JR とフェリーで宮島に到着。藤原純友、平清盛、村上水軍に思いを馳せながら、厳島神社に参拝した。非常に美味しいイタリア料理で昼食。フェリーと JR で広島駅隣接のホテルに戻り、夕食は美味しい中華料理を食べ、会話も弾んだ。アテネ大学精神科医イヨニス ミホブロス医学博士は奨学金の交付や研修旅行を中心とした MIF 活動に感謝の意を表した。最後に、ケニヤ方式の 5-3-1 拍子での閉会。その後、Starbucks Coffee Japan で、コーヒーを飲み、洗濯して、11時に就寝した。



図3：厳島神社と原爆現記念館と原爆ドーム

7月3日：6時起床、6時30分朝食。8時30分フロント集合し、バスで原爆ドームや博物館に向かい、充分時間を取り見学した。あまりに多くの不幸な犠牲が Einstein の $E=mc^2$ を実証したことや、指導者教育が遅れていた日本に相手にされず、英米で実用化され、レーダーや、正確な 600m の高度を検知した八木アンテナなどについて常時意識し、「戦を好めば滅び、忘れれば危うし：司馬法」や「人権侵害の伴わない世界平和」に代表される方向性の 40 年間の独立した研究・教育活動であったことを振り返り、感慨深い時間を過ごした。

第二次世界大戦のおり、ドイツ南西部の町ハイデルベルクはアメリカ軍からの爆撃を免れた。そのときのアメリカの戦略本部には、フンボルト財団の奨学生としてルプレヒト・カール大学ハイデルベルク（通称ハイデルベルク大学）に学んだ青年たちが含まれており、同地の教育施設・文化施設・病院の爆撃を控えた。MIF-Founderはこのエピソードを知って大変感激したからこそ、MIFを設立したと言われている。実際、このMIF研修旅行を振り返ると、このような効能も期待できると感じた。

11時以降、最後の訪問先であるマツダ株式会社の本社・工場に向かい、来客用食堂で昼食。東北大学薬学部で共同研究している生化学研究所のDr. Magdalena LUKZACはポーランド科学アカデミーを代表して、研究奨学金の交付と研修旅行を中心としたMIF活動に感謝の意を表した。さらに、ポーランドのMaria-Curie大のマルタ准教授は千葉大学地球科学科で共同研究し、Wet-SEMで金coatingしたシアノバクテリアの明確な写真が撮れる成果を挙げ、機会をくれたMIFに非常に大きな感謝をしており、論文が出版されたら送付いただけるとのことだった。その後、バスで工場見学後、資料館を見学、歴史や、部品製造や組み立ての生産方式を見学し、説明も受けた。立命館大学理工学部機械工学科に滞在しているバングラデシュのシャジャール理工大学生産工学科のアブハヤミス氏は興味深く見学していた。

さらに、デミング賞（第1回中小企業部門）受賞者の岳父からの受け売り（直伝？）ではあるが、日本製造技術を推進し、MIF-Founderも後ろ盾であったQC活動につい

て、この勘所や、日本への導入経緯、さらに、日本人の適性について紹介し、実践経験豊富な研修生と楽しい時を過ごした。



図4：ロータリーエンジン搭載ルマン優勝カー

一方、ロータリーエンジンを搭載し、ル・マン 24 時間レースで総合優勝したレーシングカーには、皆興奮した。デイトナ 24 時間レースで日本初優勝を遂げたレーシングチーム総監督（日産自動車株式会社開発主管）の林義正先生との思い出だけでなく、小学生の頃、家の 2 階で父が松田耕平マツダ株式会社社長から頂いたロータリーエンジンに関する感謝状を見せてくれたことを思い出した。母親に相手にされず、自動車好きで、コスモロータリーの大ファンである子供に話したのだろう。潤滑性のある Graphite と軽量の Al の接合に関するものであれば、当時、鉄が取りきれず零戦に間に合わず、製鋼の脱酸剤として使用した昭和電工株式会社大町工場の溶融塩電解精錬で Graphite 電極に Al が固着することを目視しているので、多分これを逆に接合に利用できると提案したのかもしれない。しかしながら、当時は小学生で内容がわからないので、博物館の副館長に調査を依頼したところ、快諾して頂いた。

3時47分広島発の新幹線で帰京した。広島、京都、横浜、品川駅で、別れを惜しんだ。3日間にわたり研究者全員と以下の内容で話した。エジプトのミニア大学から来たアハマド博士とは触媒による水素の高吸蔵速度に関する研究について、スーダンから来たELTAYB氏とは砂漠化について、インドネシアのブラビジャヤ大学のDefra YONA博士とはG20の話題である海流とMicroplastics 環境汚染について、パキスタンから来たMuhammadi氏と生分解性Plasticsについて、パキスタンから来たGILANI博士やカメルーンから来たTSAGUE博士とは殺菌について、ケニアからきたKIIRIKA博士とはなす農業について、エジプトから来たMohamed博士とは養豚、インドから来たLatha SUBBIAH博士とは制ガンについて話した。皆、驚くほど自然体であるが、国を率いていく気概が感じられ、研究奨学金の交付と研修旅行を中心としたMIF活動の意義を感じ、感謝の意を丁寧に表しながら、帰途についた。皆の輝かしい未来が見えるようだった。MIFが目指す研修旅行に近い経験を得ると同時に、私のMIFにおける役割は、各研究者の話聞き、奨学者や事務局の工夫や苦勞を感じることでであると悟った。

一方、1957年当時、衆議院議員であったMIF-Founderは、科学技術振興基本法の草稿を作成(1957年)したが、国会議案審議は不成立(1961年)であった。工学博士の参議院議員(当時)松前達郎教授を中心に再度挑戦し、科学技術基本法が議員立法により制定(1995年)。この法律は、日本の研究活動を総合的に活性化(故北澤JST理事長(当時)談)し、これに後押しされた大規模予算のJSPS外国研究者招聘制度も開始されている。MIF

活動が、この運用の参考となれば、日本国の国際貢献や安全保障にも、より効能が高ま
ると、MIF-Founder の青雲の志や叡智に思いを馳せた。

<文責：西義武>